

かれはわたしに論文の書き方を教えてくれと言ってきました。そこでわたしは二つのことを申しました。文は「である調」で書け、注は多ければ多いほどよい、という二点です（佐々木健一『論文ゼミナール』22～23頁）。

● 論文執筆の作法

1. 文体は「である調」で統一すること¹

1.1. 「ですます調」は「一人称性」（個性的な私があなたに丁寧に話かけている性格）を強調してしまう。

- 「ですます調」は、話しかけている誰か（＝あなた）の存在を呼び起こす。話かけているならば、より懇切丁寧な語りが志向されていく。それによって対象とする（あなた）の存在をさらに強調することになる。話しかけている（あなた＝2人称性）の存在を意識するほどに、ひるがえって、その存在の前提となる（私）という（一人称性）の存在もまた強調されることになる。
- 一人称性の強調とは、つまり主観的になるということ。
- 一人称性をもった「私」が強調された中で、より（あなた）に丁寧に伝えようとする表現は、気づかぬうちに（巧みな文学的表現）や（豊かな情感的表現）に傾きやすい。ひいては主張の説得力をそこに頼る意識に傾きやすい。

1.2. 「である調」は「一人称性」を抑制するための手段の一つ。

- 「である調」の語りは（すくなくとも「ですます調」よりは）話しかけている誰か（＝あなた）の存在は希薄であり、存在するとしても、（あなた）に対する語りは不親切であり「ぶっきらぼう」である。したがって、（あなた＝2人称性）の存在感を抑制することになり、同時に（私）という（一人称性）を抑制することができる。
- これは主観を抑制し、個性的な語りに陥るのを防ぐための（一つの手段）である。
- 内容について、美的感性を伴った個性的な語り方をせず、即物的に語りたい（しかし、これは執筆に熟練するほど難しい）。

2. 注釈を付けること。基本的に、注釈は 多ければ多いほどよい ²

2.1. 注釈の有無が、学術的文章か否かを区分する。

- 本文の議論を支える証拠を示すとともに、研究の舞台裏とその厚みを示す場所となる。

2.2. 注釈には 3つの種類がある（以下は佐々木健一氏による整理）。

- 1. 「出典注」 ³
引用に際して、その引用文の出典箇所を注記するもの。研究の再現性を担保する。
- 2. 「ただし書き注」
自分の説や解釈を提示したとき、それに関連する先行研究や他の説を注記することから本文において同意や批判するほどの必要がない場合の扱い方である。また、この種の注には、研究上での「謝意の表明」の意味合い含むことがある。個人的にあるヒントを与えてもらったことがあり、そのアイデアを本文で使ったという場合には、その箇所に注をつけ、謝意とともにその事実を明記することが研究上での礼儀であり、それを忘れてはならない。
- 3. 「ちなみに注」
本文の議論の流れからは「脱線」するが、それでも重要な事実や思想、文献などを紹介するもの。ただし、つねに筆者の知識のひけらかしとなるのを恐れ、抑制する必要もまたある。

3. 引用部文は「」で括り、自身の文章と明確に区別すること

4. 接続詞を意識して使用する ⁴

- 文と文、あるいは、段落と段落との論理的な接続関係を意識すること。そのために、接続詞を意識して使用すること。

5. その他

- ・ 「私は」という主語から文をはじめずに、他の主語をつかって同じ意味の文章を書くことを試みたい。どうしても困難なら「わたしたちは」とした上で、それに応じて、文全体を整え直してみる。

注 釈

1 佐々木健一「である調で断定する」、『論文ゼミナール』東京：東京大学出版会、2014年、156～158頁 [「『ですます調』が、一人称的であると同時に二人称的だ、ということです（一人称と二人称の相関は、バンヴェニストという言語学者の重要な発見です）。『ですます調』で語る際には、聞き手あるいは読み手に話しかけるという体勢をとっています、、、これに対して『である』は読者の意識をもちません。二人称的な性格をもたないため、語るという行為の一人称的性格は後退し、断定内容の三人称、言い換えれば客観的な性格が表に出てくるわけです」]。

2 佐々木健一「注の意味と付け方」、『論文ゼミナール』、123～130頁。

3 出典注の書き方の一例を以下に示す。ただし下の表記具合の限りではない。

●単行本の例

・小林剛『アメリカン・リアリズムの系譜：トマス・エイキンズからハイパーリアリズムまで』大阪：関西大学出版部、2014年、201頁。

●翻訳書の例

・エドゥアルト・ハンスリック『音楽美論』渡辺護訳、東京：岩波文庫、1854年=1960年、76-77頁。

●論文雑誌内に収録された論文の例

・福中冬子「沈黙する〈聖人〉、抽象化された〈哀歌〉：〈文化的自由のための会議〉に見る、二〇世紀音楽における冷戦ポリティックスの射程」、『慶應義塾大学日吉紀要、人文科学』第23巻、慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会、2008年、243～273頁。

●洋書単行本

・Howard Pollack, *Aaron Copland: The Life and Work of an Uncommon Man* (New York: Henry Holt, 1999), p.100.

●外国論文雑誌に収録された論文の例

・Elizabeth B. Crist, "Aaron Copland and the Popular Front," *Journal of the American Musicological Society* 56/2 (Summer 2003) : pp.409-465.

●web資料の例 ※ Wikipedia を注釈に表記することは専門家として恥ずかしい。

・YAMAHA music pal 学校音楽支援サイト「20世紀音楽の流れ – その作曲家たち」, accessed July 27, 2016. http://jp.yamaha.com/services/teachers/music_pal/study/shistory/modern/p5/

●辞書の例 – 執筆者名がある時、それが無い時

・徳永恂「保守主義」、『社会学事典』東京：弘文堂、1988年、812頁。
・「保守主義」、『社会学事典』東京：弘文堂、1988年、812頁。

- 注釈における二度目の以降の表記は略記も可能。
・小林剛『アメリカン・リアリズムの系譜』、201頁。

- 直前に表記したものは、以下のように、邦文であれば「同前」、欧文であれば *ibid.*、と記す。

(注 1) 小林剛『アメリカン・リアリズムの系譜』、201頁。

(注 2) 同前、50頁。

(注 3) Howard Pollack, *Aaron Copland*, p.10.

(注 4) *ibid.*, p.11.

4 目安として「8つの接続関係」を記しておく。

- | | | |
|-------|---------|--|
| 1. 付加 | - そして | and, plus |
| 2. 理由 | - なぜなら | because, since, seeing that |
| 3. 例示 | - たとえば | for example e.g. (ラテン語 “ <i>exempli gratia</i> ” の略) |
| 4. 転換 | - しかし | but, however, nevertheless |
| 5. 解説 | - つまり | in other words, that is to say, actually, i.e. (that is と読む) |
| 6. 帰結 | - したがって | thus, therefore, hence, for, since, |
| 7. 補足 | - ただし | (however) |
| 8. 対比 | - 一方 - | whereas, while |